

## 特別展「揚州八怪」

「揚州八怪」展の企画を構想したのは、二〇一七年であった。金冬心や鄭板橋が号をもって通るように、彼らの書画は日本人にかねてより愛好されてきた。かつて大阪市立美術館では、一九六九年四月二十六日から五月二十五日にかけて「八大山人・石濤と揚州八怪の名画展」と題し、二十二人の作品一四七点を展観した。以後約五十年、謙慎書道会などの展覧を除き、美術館・博物館での大規模な揚州派の展覧会は国内では行われていない。海外に目を向けても、澳門藝術博物館をはじめとする諸館で、浙派・呉派・松江派・金陵派・新安派・虞山派・婁東派・海上派・嶺南派など様々な展覧会が開催されるなか、揚州派は何故か大きくは扱われていないようである。

また、一九六九年の図録を見る限り、朱耷（八大山人）・石濤や八怪の名がつく作品があれば集めたという感が否めず、半世紀を経た現在の研究水準に照らせば、かなり疑点のある作品が多い。そこで、国内の作品から調査を開始すると、間もなくして揚州派を主題とする企画がかなり苦しいことが判った。「八怪」といわれる書画家は総じて十五人ほど数えられるのだが、国内に存在する作品だけでは真作と見做せる作品がない、あるいはほとんどない作家が少なからずいる。さらに一例に大家である鄭燮の絵画を挙げれば、数多くの作品が収蔵されているものの贋作が極めて多く、代表作というに値するものは皆無に近い。そこで、かつてより友好関係があり、

揚州派の名品を数多く収蔵している上海博物館に借用を依頼してみることにした。

上海博物館とは、大阪府・上海市友好提携五周年にあたる一九八六年に「中国明清書法名品展―上海博物館所蔵―」を開催し、一〇〇件の書法作品を拝借して以来、今日まで交流を続けてきた。大阪市・上海市友好都市提携二十周年にあたる一九九四年には、両館が共同で「中国書画名品展」を両都市で開催、双方から計一八九件が出品された。その後、二〇一〇年に上海博物館で開かれた「千年丹青 日本中國藏宋元繪畫珍品」には九点の宋元絵画作品を貸出している。

おりしも二〇一八年には、上海博物館の「丹青寶筏 董其昌書畫藝術大展」に董其昌「盤谷序書画合璧卷」（重要文化財）の貸出が決まっていた。翌年一月に併催される国際シンポジウムで弓野と森橋が研究発表を行う機会に合わせて、楊志剛館長を拝訪、ご協力を要請、十一月に再訪して快諾をいただいた。

本展は当初、二〇二〇年八月二十九日～十月十八日の会期を予定していた。上海博物館での二度の作品調査をもとに協議、相互の調整を経て、三十五件の借用が決定した。いずれも本企画にふさわしい優品で、展覧会の主軸となる作品群であった。また、「八怪」の郷里やその周辺の調査を開始、一九九三年三月に膠州（高鳳翰）・青島・高密・諸城、六月に南通（李方膺）・如皋、十二月に寧化（黃慎）・長汀・上杭（華岳）と回り終え、二〇二〇年三月に淮安（迎寿民）・興化（李鱣・鄭燮）そして揚州（高翔）を予定していた。

ところが、国内の調査もほぼ終了、ポスターやチラシなど広報物の作成に取り掛かっていた矢先に、新型コロナウイルス感染症が世

界的な広がりを見せ始めた。三月末には先行配布用チラシのデザインは出来上がっていたが、状況は悪化、四月に入って主催者間で断続的に協議し、二一年六〇八月への延期を決定、四月二十日から上海博物館を皮切りに関係者に連絡した。八月には会期を二一年六月十二日〇八月十五日とし、再調整を行うこととなった。

以後、個人蔵の作品を中心にさらに調査を進め、作品総数を一〇八件に増やし、再度広報物、図録、会場ディスプレイなどの作業を進めてきた。すると三月末になって上海博物館から、国家文物局から輸出の許可が下りない可能性があるとのメールが来た。空輸時に上海博物館ないし大阪市立美術館の人員の随伴がないことが問題になっている、ということである。往来する人員の両国それぞれの隔離期間を考え、また入国さえ許されない可能性があるため、飛行機に同乗するのは現実的でない。我々は双方がそれぞれの館と空港までの陸路の輸送を管理し、近年時々ある作品チェックと展示作業をリモートで確認する方法をとる方針であった。

四月八日、上海博物館から、やはり国家文物局からの許可がおりないという結果が伝えられるとともに、何とか輸出する方法を会議で検討してください、新たな提案をいただいた。新鑑真号フェリーを使った輸送である。我々が乗船して上海港まで行くが下船はせず、上海側が港まで作品を運んで引き渡す、という方法である。一九九末から二〇年初に、上海博物館では日本から作品を借用して「唐招提寺所蔵鑑真の文物と東山魁夷の障壁画」展を開催していた。閉幕際に新型コロナウイルス感染拡大が始まり、航空便は全てなかった時にとつた方法だという。文物局への再申請に時間を要し、開幕日に間に合わない、一級文物は許可されない、との条件であったが、他の策は

ないと判断し、日本側でもフェリー会社と連絡をとり、乗船者のパスポートのコピーまで送っていた。だが同二十六日に、鑑真号の停泊港が以前と異なる場所に移り、コロナ対策の状況からして、これも断念せざるを得ないとの連絡が入り、楊館長から当館篠館長へ丁寧なお手紙をいただいた。

上海博物館の作品が来日しなくなったことで、開幕まで一か月半、まず、すでに作成済のチラシや、かろうじて印刷を止めていたポスターなど、一切の広報物の再製作を行った。図録やグッズについては、変更は間に合わず予定通り作成することとした。作品点数の減少に伴い、使用展示室も北二階+南二階の一部から南二階に変更、展示図面も一から引き直した。作品リストも修正し、館藏品・寄託品から参考作品として六点を追加した。コロナ禍ということも配慮し、十六本の動画を作成して配信した。

上海博物館の皆様には大変尽力いただき、同館の作品を様々なパネルで紹介させて頂いたほか、館の紹介ビデオのほか、楊館長の挨拶、凌利中主任の作品解説の動画を新たに製作して提供して下さった。心よりお礼申し上げたい。

結局、展覧会はコロナ第四波の影響を受けて、六月二十二日から開幕となった。  
(森橋なつみ／弓野隆之)